



教職大学院

Newsletter No.

121

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.4.20

教科センター方式導入校に着任して

東京都板橋区立赤塚第二中学校 校長

荒井 秀 樹

1 本校と福井大学との連携

本校は、校舎の改築に伴い、板橋区で最初の教科センター方式の学校として平成25年に再スタートを切りました。教科センター方式の開設に伴い、本校の職員は福井大学の拠点校である安居中学校、至民中学校を視察させていただきました。両校は、教科センター方式を導入し、多くの実績を残している学校です。実際に学校を訪問することで、教科センター方式に適した学校運営、授業形態等、多くのノウハウを学ばせていただくことができました。

それを機に福井大学との交流も始まりました。松本先生や木村先生には、本校の校内研修会に毎回おいいただき、授業改善についての多くのご示唆をいただきました。本校の職員にとっては大きな刺激となり、漠然としていた授業改善の方向性がより具体的に見えてきたのも福井大学の先生方の力によるものでした。

また、本校から二人の教員が週末に福井大学教職大学院を訪れ、学ぶ機会を与えてくださいました。現在教科センター方式の良さを十分活用しながら学校が運営できているのも、この二人の教員の学びが生かされているからだと思います。

現在は、福井大学の拠点校として認定していただき、現在においても校内研修の折には、木村先生、半原先生に講師としておいいただき、本校の学校づくりの大きな支えとなっています。

また、初夏と冬の2回、福井大学で開かれるラウンドテーブルには、数名の本校教員を招いていただき、若手教員に刺激を与えていただく貴重な場となっています。

2 福井大学から学ぶ授業改善に向けた研修の在り方

本校は、練馬区や埼玉県和光市に隣接し、昔から生活指導上の課題を多く抱える学校でした。教科センター開設当時の生徒たちの状況は決して落ち着いた状況にはありませんでした。

そんな状況の中、福井大学の先生方から最初に学んだのは、「授業の中で人を育てる」ということでした。1時間1時間の授業を通じて、生徒相互の好ましい人間関係を築いていくにはどうしたらよいのか。そのテーマの答えについて、福井大学からもご指導いただき、学んでいきました。

従来通りの説明と板書だけの授業では、知識を与えることはできても、好ましい人間関係づくりまで高めていくことはできません。生徒同士が互いの考えを交流し、互いを認め合う場面を授業の中に取り入れていかなければなりません。

しかし、生徒が落ち着かない状況の中では、授業規律を何よりも優先させなければいけないという考

内容

巻頭言	(1)
スタッフ 自己紹介	(3)
院生 自己紹介	(9)
2019 年度開校式	(14)
2019 年度教職大学院年間計画	(15)
実践研究福井ラウンドテーブル	
Summer Sessions 2019 案内	(16)
スケジュール・編集後記	(16)

えが主流であった当時、自由に意見を述べ合うグループワークの場面に授業に取り入れることは規律の乱れにつながるという考えも根強くありました。

そこで、本校が取り入れたのは、福井大学で提唱している「授業中の生徒の変化を見取る」手法でした。教員の小グループを編成し、どんな活動の時に生徒の目が輝くのか、どのような課題だと生徒が自ら取り組もうとするのかなどを観察し、生徒の視点で授業を振り返る研修を取り入れていきました。

毎月行う校内研修では、福井大学で行っているラウンドテーブルの手法を取り入れ、率直な意見交換を行ってきました。小グループは教科や専門性に関係なく編成し、事務職員や栄養士もグループの一員として加わり、それぞれの立場から感じたことを伝え合い、考え合うことで、授業改善を図ってきました。

3 教科センター方式の学校に対する考えの変化

私は、昨年度4月に教科センター方式を採用した赤塚第二中学校に着任しました。1年間、生徒や教職員の様子を間近で見ていて、教科センター方式に対する印象が大きく変化しました。

着任前は、500人以上の生徒が在籍する学校で、教科センター方式を採用していることへの負のイメージがむしろ強く、通常と異なる学校経営への不安を抱えての着任でした。

- ・毎時間、教科教室に移動することで、個々の生徒の所在が把握しにくいのではないか
- ・他学年生徒との不要な接触の機会が多く、生活面への悪影響を及ぼすのではないかな
- ・主体的判断に従って教室移動を速やかに行えない生徒が多くいるのではないかな
- ・教科に必要な道具を教室に忘れ、授業の進行に影響を及ぼしているのではないかな
- ・限定的にしか使わないホームルーム教室という環境で、生徒の学級意識は高まるのか
- ・教科ごとの学びの広場の存在が、教員の負担を増やすのではないかな

これらが、着任前に抱いていた私の教科センター方式に対する不安でした。

しかし着任してみると、生徒は落ち着いた様子であり、むしろ教科センター開設当時から、これらの不安を払しょくするための学校経営が行われてきたことを感じました。

その大きな柱が次の3点です。

1 集団美を根底における生活指導

2 生徒が自ら受けたいような授業への改善

3 教員個々の力を高めるための研修づくり

教科センターの基本ともなる生徒の自主性と規律意識を育てるために、「集団美」を生活指導の基本に据え、時間に対する意識、生徒の主体性を伸ばす行事づくり、集団の中の個を意識させる指導など、教員は日頃から緊張感をもって取り組んでいました。

授業改善においては、主体的・対話的な深い学びを文部科学省に先駆けて取り入れ、参加の充実感を味わえる授業づくり、思考をめぐらす授業づくりなどの在り方を共有しています。ICT機器の活用を授業改善の中心に添えたことも、生徒にとって具体的にわかりやすい授業づくり、参加型の授業づくりの実現につながったのではないかと思います。

研修では、福井大学との連携のもとにラウンドテーブルの手法を取り入れ、教科や職種に関係なく、誰もが積極的に意見を交換できる研修手法を取り入れていました。それにより、より広い範囲から教師は学び、教師の技術を伸ばす教員のための研修から、子どもの変化や意欲に目を向ける子ども達のための研修スタイルへと転換を図っていました。

4 通常の中学校の経営にも生かせる教科センター方式の経営理念

発想の転換が大切だと思いました。通常和学校とは真逆の発想が教科センター方式には必要です。しかし、教科センター方式を維持するための発想や実践は、通常和学校にも多く活用できます。例えば、学年を隔てる生活指導から全学年の交流から生まれる生活指導への転換は、学級に限られていた教科係を教科リーダーへと変え、全学年の生徒が共同して自分たちの学びの広場を創り上げています。先輩の学習の取組や授業の様子を日々下級生は目にし、全体の学習意欲の向上にもつながります。

生活指導においても、すべての教員が全学年の生徒の様子を毎日観察できます。教員が全学年の生活指導に関わろうとする教員の意識も他の学校以上に育ってきます。

一人一人の教員が、教科センターのデメリットを認識することにより、むしろ他校以上に、緊張感をもって学習指導や生活指導に臨んでいるのだと思います。本校の活動には、教科センター方式を行っていない学校にも役立つ経営法が詰まっているように思います。

スタッフ 自己紹介



牧田 菊子

4月1日付で連合教職大学院の教授として着任いたしました牧田菊子と申します。3月までは福井市明道中学校に教頭として勤務していま

した。明道中学校も福井大学も母校であり、通勤途中の風景や校内のいろいろな所で当時が思い出され、なつかしさや愛着を感じる中、こうして2校続けて母校に勤務できる幸せを実感しているところです。

大学を卒業し、赴任したのは丹生郡越廼村越廼小学校で、1年生18人を担任しました。その後、福井市内の中学校で国語科教員として、県教育委員会で指導主事として勤務し、4年前、越廼中学校教頭として再び越廼地区に赴任したのです。担任した子達はもう30歳を超えていましたが、再会の場面では当時に戻って話ができました。

そんな中「地区の過疎問題を解決するため、地域活性化に向けて地域の人達と共に取り組みたい」という願いが、社会科で過疎について学んだ生徒達から生まれ、「越廼PR」という活動を中学生が主体となって始めました。自分達の思いを地域に伝えて共有したいと考え、新聞を定期的に発行して返信をもらう企画を実現したり、活性化策について地域の人達と検討する場を持つたりしました。そして、特産である水仙の球根を、園児から高齢者まで越廼地区の全世代の人達が中学校に集まって鉢植え（500鉢）し、皆で福井駅前に出かけ、過疎問題を題材にした劇を中学生が上演した後、手作りの観光パンフレットと共に鉢植えを配布するという企画を実現させました。「越廼

まきだ きくこ

PR」活動は、「越廼サミット」と名付けた場で中学生と地域住民が振り返り、次年度に向けて成果と課題を共有しました。後日、鉢植えを受け取った県内外の人達から開花の知らせが何通も届きました。水仙を通して地区をPRできた手ごたえと見ず知らずの人達と繋がった喜びが、生徒達の中でやってよかったという思いとして残り、さらなる意欲付けになりました。「越廼PR」は、地域全体の絆を強くし、住民の地域に対する思いを熱くしたように思います。そして、そこには常に生徒や地域に寄り添う仲の良い教職員の協働がありました。越廼地区は昔と変わらず温かく、私にとっては第2の故郷です。

そして、次に赴任したのが明道中学校です。新校舎は5階建てで、各教科学習室やICT機器の充実など恵まれた環境の中、生徒達は熱心に学習に取り組み、生徒会活動や部活動に励んでいました。卒業して40年近くになりますが、校歌を赴任当初からしっかり歌えたことは自分でも驚きでした。生徒会の目標である「伝統明道あいうえお」の「う」は「歌のすばらしい生徒」です。卒業式では、送辞・答辞ともに合唱のことが語られました。明道中学校では様々な場で合唱に取り組みます。披露される合唱は実にすばらしく、聞く人の心をいつも感動で満たすのですが、生徒達は創り上げる過程で様々な困難に直面し、悩みます。そして、困難を自分達で乗り越えることで絆を深め、成長を実感します。また、先輩の合唱を聞くことによって後輩は目指す姿を具体的にイメージしたり、後輩の合唱を聞くことによって先輩はそのがんばりを認めたり自分達のこれまでの足跡を振り返ったりしながら、互いに「後輩にいい姿を見せられるようがんばる」「先輩を越えられるよ

うがんばる」という思いをつなげていきます。生徒の先輩・後輩に対するこのような思いは、様々な世代で構成された教職員の中にも醸成されているように思います。また、明道中学校には同窓会や後援会組織があります。人的にも物的にも温かく支援いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

採用から 32 年が経過した今、社会は急速に変化し、それに伴い学校に要求されることも増えてきたと感じます。特に、教頭を務めたこの 4 年間は、学校運営上のさまざまな課題に直面する中、学校におけるマネジメントの必要性を痛感しました。

置かれている状況は異なるものの、学校は、子ども達に「自分で考えること」「その考えや意見を人に伝えること」「調整できること」を習慣として身に付けさせたいと考えています。そのため、家庭や地域と連携して生徒の自立を支援し、変化が激しく予測が困難な未来社会を主体的に生き、社会に貢献できる大人を育てることを、教育目標としています。

私自身がこの目標を意識し、管理職やミドルリーダーを目指す教員、若手教員、教員を目指す人などさまざまな世代の人達と、実践協働研究を通して共に学んでいきたいと思っています。それぞれの学校の抱える課題は様々ですが、それらの課題についていろいろな専門性をもつ大学スタッフと共に解決に向けて取り組んでいく中で、皆で力量を向上させていきたいです。連合教職大学院では、現場の教員や各県・諸外国からの訪問者など教育関係者をはじめとするさまざまな専門家との出会いがあります。その出会いを活用して専門職のネットワークを拡充し、さまざまな視点から自分の実践を省察する機会としたいです。変化の激しい未来社会で夢をもって主体的に生き、学び続ける児童・生徒を育てるには、教員自身が「人・本・旅」を通して生涯学び続けることが不可欠と考えます。様々な人と出会い、交流しながら学び合い、その人と出会えたからこそ学べたということを互いに創り出していける学びの場を創り出していきたいと思っています。



血原 正純

4 月 1 日付で連合教職大学院の准教授として着任いたしました血原正純と申します。3 月までは、福井市教育委員会事務局学校教育課（以下、市学校教育課という）で主幹（指導主事）として勤務して

おりました。平成 3 年 3 月に福井大学教育学部中学校課程を卒業し、まさか自らがその大学に勤務するとは、思ってもいませんでした（思ってもいなかった異動は二度目です）。この自己紹介を機に、中学校 24 年間、市学校教育課 4 年間の教職人生を振り返り、連合教職大学院勤務での抱負を述べさせていただきます。

ちはら まさずみ

大学卒業後、平成 3 年 4 月、新採用教員として金津中学校に勤務することとなり、7 年間勤めました。当初は中学校技術科の教員として採用されたことで、担当する教科は技術科と書写でした。特に、1 年目の秋に選択教科（平成 10 年の中学校学習指導要領の改訂で廃止となる）の全国大会が開催され、採用半年後に木材加工の領域で授業を公開させていただきました。今思うと、先輩の技術科の先生に指導を仰ぎながら、半期の指導計画や本時の学習指導案作成、研究内容に沿った授業展開の工夫などに取り組みました。当日は入れ替わりながら 20 名ほどの参観者があり、訳のわからない状態で、冷や汗を流しながら必死に授業を進めたことが思い出されます。平成 9 年秋には福井県にて全国中学校技術・家庭科研究大会が開催され、坂井地区では電気領域の公開授業が三国中学校で行われました。授業公開に向けて頻繁に会場

校へ足を運び、教材・教具の作製や学習指導案の検討を通して、協働しながら実践研究を進めていく意義やその重要性を強く感じることができました。

そして、社会科教員としての大きな転機となったのが、平成 10 年 4 月の灯明寺中学校への異動でした。異動の 3 年ほど前から社会科を担当し始めており、年々その授業数は増え、技術科と社会科の担当割合は半分半分までになっていました。しかし、灯明寺中学校では社会科担当教員として異動しており、技術科の授業が全くなくなったことに驚くとともに、その現実を受け入れ、覚悟を決めた瞬間でした。今になって考えると、教員人生の最大の転機だったと思います。平成 10 年に福井・高志地区中学校教育研究会社会科部会の自主研究組織である福井市中学校社会科授業研究委員会（以下、市社研という）に入会し、翌年から縁あって附属中学校（現、附属義務教育学校後期課程）の研究協力員を 6 年間させていただき、中学校社会科教員としての学びが大いに広がり、深まっていきました。そして、平成 16 年には市社研歴史部会の提案授業で、通史の学習に地域の歴史を取り入れて単元を再構成した「提言・創造型」の授業を公開させていただきました。私自身、当時の実践を市社研の研究紀要である「平成 25 年度社会科授業研究の歩み＝『25 年の軌跡』特別号＝」にて、生徒が歴史的事象について自分の言葉で何事かを語れるようになることは大変素晴らしいことであり、今後、共に生きる社会を形成していく上で、必要不可欠な資質を育てることができたのではないかと実感した授業実践だったと、10 年後にふり返っています。

平成 17 年 4 月より足羽中学校に勤務となり、市社研歴史部会の提案授業で単元構成や授業づくり等で、大変お世話になった歴史部会の部長の先生と一緒に働き始めました。そして、この年から市社研歴史部会の副部長という役職をいただき、福井県社会科研究協議会（以下、県社研という）の授業研究にも多くの関わりをもたせていただくようになりました。その後、平成 19 年 4 月より市社研歴史部会の部長と県社研歴史部会の部長という重責をいただき、平成 20 年度県社研奥越大会、平成 22 年度県社研鯖丹大会に携

わり、当時の研究主題「社会に主体的に参画する子どもを育てる社会科学習」に基づいた単元構成・授業づくり・研究のまとめ等に、奥越地区や鯖丹地区の社会科の先生方と協働で取り組ませていただきました。また、平成 22 年度には福井・高志地区中学校教育研究会集会和福井県中学校教育研究会で実践を発表する機会をいただきました。当時、現学習指導要領の移行期であったことから、日本の諸地域「中部地方の学習」を単元構成し、先行実践という内容で話題提供をさせていただきました。内容は中教研・県中教研の研究主題に基づき、教材開発と学習内容の習得・活用・探究を意識した学習活動の展開（単元構成）の 2 つを研究の視点として授業実践に取り組み、その成果と課題をまとめたものでした。他にも時は平成 20 年度に戻りますが、社会科以外で生涯に一度の経験をさせていただきました。それは、全国中学校体育大会卓球競技（以下、全中という）が敦賀市総合運動公園体育館で開催され、当時、県中学校体育連盟卓球競技の専門委員を務めていたことから、式典部長という大役を承ったことです。団体戦と個人戦の出場を合わせると 850 名を超える選手に対し、体育館フロア以外で入場順に待機させ、体育館内を 1 周させてから整列し、開会式を行うという大きなミッション、優秀 13 校表彰、閉会式の全 5 日間に渡る日々は、まさに貴重な経験でした。その時、福井市と永平寺町の卓球部顧問の先生方にお手伝いいただき、すべての全中式典を滞りなく終えることができました。中でも待機場所にはチームの先頭を示すポイントを取ったこと、開会式において 850 名を超える選手を体育館に整然と並べるため、全員の立ち位置にポイントを取ったことは、全中の式典をよりよいものにしたいというスタッフ一同の願いを叶える大変な作業でした。開会式の直前には立ち位置のポイントを基準に一旦整列をさせ、開会式での注意事項に加え、そのポイントの意義を語ったことは今でも忘れることができません。

平成 24 年 4 月に森田中学校へ異動しましたが、継続して市社研歴史部会の部長、県社研歴史部会の部長として県社研大会福井大会の授業研究等に携わっていきました。その 10 月に、研究主題「未来につ

ながる力を育む社会科学習」に改められた県社研福井大会がフェニックスプラザにて開催され、歴史部会で検討してきた提案授業を代表の先生に公開していただき、副部長の先生に研究の成果と課題を発表していただきました。特に、その成果として挙げられる「単元を貫く学習課題の設定」、「知識の構造図(現単元の構造図)の導入」、「社会事象に対する価値判断(学習者の意思決定)」が次期学習指導要領の授業づくりのポイントとして示されており、福井県の社会科学研究の先進的な取組には驚くばかりです。その後、平成25年4月からは市社研委員長(総括)、県社研総務として会全体の運営に携わらせていただくとともに、3分野(地理・歴史・公民)の授業研究等にも関わらせていただきました。その間、市社研は発足25年を迎え、その年に部会長の校長先生の指導を仰ぎながら、市社研の研究紀要である「平成25年度社会科授業研究の歩み＝『25年の軌跡』特別号＝」の企画・編集・刊行に取り組みました。今振り返ると、社会科の研究に邁進できた理由は、当時、勤務していた学校の管理職の理解に尽きと思っています。特に、森田中学校では社会科に関する出張が頻繁にあり、社会科では教頭先生にたくさん支えていただきました。教頭先生は、私が附属中学校の研究協力員をさせていただいていた時、附属中学校の社会科を牽引されていた方でした。2学級分の授業をもつていただいたり、研究に関する原稿を校正していただいたり、提案授業の展開にアドバイスをいただいたり等、困ったときには、常に教頭先生を頼りにしていた自分を思い出します。また、平成26年4月には県中体連卓球競技で団体優勝の実績のある校長先生が赴任され、前年度に新設された男子卓球部の指導を、出張の折には快く引き受けていただけたことも大変大きかったと感じています。

そして今から4年前、一度目の思ってもいなかった異動がありました。それは、市学校教育課への出向でした。初任校の金津中学校7年間、灯明寺中学校7年間、足羽中学校7年間と勤務してきており、森田中学校の勤務もあと4年はあるだろうと思っていた矢先、突然の異動でした。しかし、その後の4年間は貴重な経験をさせていただく機会が多々ありました。

まず、小学校勤務の経験がない私は、学校訪問を通して小学校の授業や研究に触れられたり、児童がのびのびと学校生活を送る様子を見たりしたことで、教員の一人一人の児童への丁寧な関わりや主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善への積極的な取組等が小学校教育の土台となり、児童一人一人の成長を支えていることに気付かされました。もし、森田中学校にそのまま勤務していたならば、小学校の世界を知らないまま、教員生活が終わっていたかもしれません。また、福井市内には23の中学校があり、4年間ですべての学校を訪問することができ、学校運営の方針と実情の理解、各学校の研究に合わせた授業実践の参観、研究協議会への参加と助言を通して、自らの視点や考え方を広げたり深めたりしながら自己研鑽することもできました。さらに、福井市全体の教育に関する方針の協議と策定、教員の資質向上のための研修計画と実施等を通して、次期学習指導要領の完全実施を見据えた教育の在り方について学ぶこともできました。加えて、スクールカウンセラーや学校生活支援員の配置やスクールソーシャルワーカーの派遣を通して、子どもの学習環境を支える部分の充実を図るとともに、市学校教育課と外部機関との良好な関係構築にも努めることができました。

この度、連合教職大学院へ勤務するに当たり、次の2つを教師教育研究の柱にしたいと考えています。その一つは、院生の拠点校の学校現場へ出向き、概念や理論の世界との、そして授業実践や学校づくりの状況との省察的な対話を行いながら、院生が理論を練り上げていく課題研究に対し支援できれば幸いです。その上で、3つのコース(授業研究・教職専門性開発コース、ミドルリーダー養成コース、学校改革マネジメントコース)の特色と学校拠点方式を活かし、拠点校の管理職の学校経営マネジメントや組織マネジメントを学び、カリキュラム・マネジメントによる学校の教育目標の実現や学校力の向上に具体的にどう取り組むのか、自らの教師教育研究の課題である「学校のマネジメント機能の強化による学校力の向上の省察」について追究し、理論を練り上げていきたいと思っています。もう一つは、福井県教員育成指標

(以下、育成指標という)に基づく人材育成です。特に、福井県の免許更新講習の企画・運営に福井県教育総合研究所(以下、研究所という)と連携して取り組ませていただくこととなり、免許更新講習の内容に育成指標をより反映させていきたいと考えています。平成30年度に福井県教育委員会が新しい育成指標を公表し、その基本的な考え方と活用について方針を打ち出しました。それに合わせてこの育成指標の具現化を図るため、研究所が研修計画概要を示しました。そして、平成31年度もすでに見直しされた育成指標が公開されています。しかし、育成指標及び研修計画概要の策定・運用は教育行政の取組とイメージされ、学校現場関係者には当事者意識をもちにくい

内容と思われます。そこで、研究所と連携して免許更新講習の企画・運営を行っていく中で、育成指標をより反映させるための具体的な手立てを講じたいと考えています。

今日、社会の急激な変化に伴い、学校教育もさまざまな改善が求められています。その変化に適切に対応するためには、絶えず自己研鑽に努める必要があると考えます。院生の志高い「学び続ける学生ならびに教員」と真摯に向き合える機会を大切にし、改めて自分自身も学び成長できる場にしていきたいと思っています。



矢内 琴江

この4月から、教職大学院に特命助教として着任いたしました矢内琴江と申します。よろしくお願いいたします。福井大学には、2012年に博士課程の院生

になって以来、毎年ラウンドテーブルに来させて頂いていました。私は、早稲田大学のラウンドテーブルや、東京ラウンドテーブルに実行委員として運営に関わっていました。福井大学のラウンドテーブルへの参加は、ラウンドテーブルの運営やそこでの自分自身の役割をふり返り、ラウンドテーブルの意味を考える機会になりました。今回、福井大学教職大学院に勤務させて頂けることになり、大変嬉しく、またワクワクとした気持ちでいます。

私は、3月末までは早稲田大学文学部教育学コースで講師(任期付)として勤めていました。人権教育、フェミニズム実践、実践分析の授業を担当しました。また、有志で集まった学部生・院生と一緒にジェンダー・ワークショップを企画し運営する取り組みも行っていました。

やうち ことえ

私の専門は、社会教育、ジェンダー論、ケベック研究です。具体的には、カナダ・ケベック州でフェミニズムを軸としながら展開しているコミュニティの学習の研究です。例えば、フェミニズム・アートのギャラリー、民衆教育や社会福祉の領域の支援者たちの学習グループ、DVを受けた先住民女性の支援コミュニティの実践記録を読んだり、実際に会って話をしたりしながら研究をしています。

私は高校生の時に、人間の性を男か女かで分けること、異性との恋愛を当たり前とすること、男らしさ・女らしさがあることにとても疑問を持ちました。そこで、大学で、セクシュアル・マイノリティの人権問題や、日本やフランスのフェミニズムを研究しました。修士課程はフランス文学に進みましたが、大学の中のハラスメントをテーマにしたフォーラム・シアターや、女性たちの朗読演劇に関わったことがきっかけで、社会を変えていくためにもっと実践的な研究をしたいと考えました。そして、ケベック州のラヴァル大学のフェミニズム・スタディーズの履修証明プログラムに留学し、女性支援、アクティヴィズムなどの現場にいる仲間たちと一緒に

に学びました。日本に帰国して出した修士論文は、ケベックのフェミニスト音楽グループの歴史と歌詞の分析でした。

また、修論を執筆中に、東日本大震災があり、復興支援に関わりました。まず、大学の外では、学生による復興支援団体で学生をボランティアに派遣するプログラムの運営をしました。その中で、「支援者や支援組織自体がジェンダーやダイバーシティの視点をもつことなしに、より良い支援をすることは出来ないのではないか?」「ボランティアに行った大学生たちが、その経験を大学での学びや、より良い社会へと変えていくことにつなげるには、どのようなふり返りを組織したら良いのだろうか?」といった問いを持ちはじめました。それと同時に、大学の中では、院生たちが中心になり復興支援に関わる情報を提供する団体を立ち上げ運営をしました。「今の被災地の状況に、研究者として何が出来るのか?」「被災地の復興の展開のこれからを支えていく研究・大学のあり方とは?」といったことを色々な専門の院生仲間と繰り返し話し合いながら活動をしました。そうした経験がきっかけとなって、博士課程は教育学に進むという方向転換をしました。

博士課程に入ってから、私自身の研究と並行して、いくつかのラウンドテーブルの運営に関わりました。1つは早稲田大学のラウンドテーブルで、こちらは学部生と院生が企画と運営の中心になって

いました。もう1つは東京ラウンドテーブルで、こちらは公民館職員の方たちや市民の方たちと大学の研究者が協働で企画し運営していました。さらに、私にとって大事な経験となったのは、福島県男女共生センター公募型研究事業に関わり、復興支援ラウンドテーブルの組織運営の実務を担当したことでした。このラウンドテーブルは、人権の保障と男女平等を実現していく視点から、福島県の長期にわたる復興を支えていくため、県内の様々な専門や経験をもつ大学教員が協働で、女性支援者や地域の様々な領域で県民の支援に携わる人々の学び合うコミュニティの形成に取り組みました。私にとって、このラウンドテーブルは、地域や学習者の現実に向って立ち、男女平等や多様性の尊重を実現していく視点から学習を支えることや、その実務の意味を実践的に考える経験になりました。

また、こうした仕事で経験し学んだことから、自分の地域で、近所の人たち、大学生たち、あるいは海外の研究者たちと、哲学カフェをしたり、福島県富岡町の手仕事展をしたり、上映会を開いたりするヒントを得ました。

これまでの実践や研究の中で培ってきたことをいかしつつ、福井で出会う皆さんの実践に学びながら、学校や地域で、また国境を越えて、人々が豊かにつながり合い・学び合い、その人らしく生きていける社会を創っていくことを支えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

院生 自己紹介



石田 涼 いしだ りょう

はじめまして。このたび、教職専門性開発コースに入学した石田涼です。愛知学院大学文学部歴史学科出身です。教員免許は中学校社会、高校地理歴史、高校公民、いずれも第1種で取得しました。

大学では歴史の中でも西洋史を専門に学んできました。歴史を学び、自分が生きている世界についての理解を深めたり、歴史を学ぶことでどのように未来を創造したりしていくのか、これは私が歴史を学ぶ意義であると考えていることです。子どもたちが歴史を学ぶ意義を考え自分の人生観を広げられる教員を目指したいです。また、バレーボールを小学生のころから続けてきており、それを通して培った忍耐を生かして子どもの成長を後押しできるような教員になりたいです。

MIでの長期インターンシップでは、学校にとっての戦力のなることを目標の1つとしたいです。学部時代の教育実習は、授業を中心に行いましたが、授業での教科指導だけでなく生徒指導、学級経営、特別活動、部活動を通して総体的に教員としての資質・能力を向上させたいです。教員は、子どもが社会に出たときのことを常に考え、日々愛情をもって接し、時には厳しくしかることも必要であります。私は、子どもたちの人間性の成長を後押しし、将来的に夢を実現できる力を育成できる教員になれるように、一日一日課題をもって取り組みたいと思います。

私は、青山学院大学陸上競技部監督の原晋氏を非

常に尊敬しています。もともと、スポーツはバレーボールとサッカーが好きで、陸上にはあまり興味がありませんでした。しかし、2015年に青山学院大学が箱根駅伝で初優勝し、原監督がメディアに取り上げられるようになってから、箱根駅伝を毎年見るようにまでなりました。私は、原さんの書いた『フツーの会社員だった僕が、青山学院大学を箱根駅伝優勝に導いた47の言葉』という本を読んで、とても感銘を受けました。原監督自身は、箱根駅伝に出場したことがなく、実業団をけがでわずか五年で引退した後、10年間陸上とは全くかわりのないサラリーマンをしていました。そんな原監督が、当時箱根駅伝に出場することすら難しかった青山学院大学を常勝軍団に押し上げたのは、会社員時代に培ったビジネス哲学でした。私は学業、バレーボールを学生時代、自分なりに精を出して取り組んできましたが、思うような結果を出すことはできませんでした。それで、今後教員になるうえで、本当に自分で大丈夫なのかというように自信がなくなるときもありましたし、今でもあります。そんな時この本に書いてあることを読み、指導者としての在り方、組織の作り方、様々なものに感銘を受けました。

この本から学んだのは、常識を疑い、自ら理論を構築することです。教職大学院では長期インターシップやカンファレンスを通して、様々な子どもたちとコミュニケーションをとり、先生方と協力して問題を解決する。実践と反省を繰り返し、自らの教育論を構築していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



井上 尚紀 いのうえ たかのり

この4月より、授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました井上尚紀と申します。昨年度3月までは、福井大学教育地域科学部の理数教育コースに所属していました。取得免許は、小学校一種、

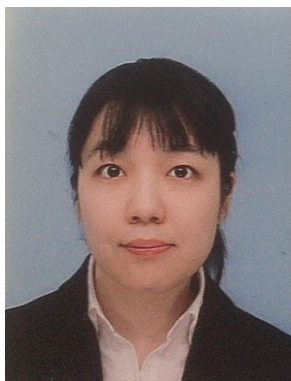
中学校一種（理科）高校一種（理科）、幼稚園一種です。

教員養成系課程であったということもあり、子どもたちと関わる機会の多い学生生活を送ることができました。アルバイトでは、個別指導塾及び家庭教師を、ボランティアでは附属学校の活動支援に参加したり、教育現場だけでなく医学部の学生と共に院内学級に通う子どもたちの宿泊活動の補助をしたりしました。大学内で取り組んでいた探求ネットワークでは“ふれあいフレンドクラブ”に所属し、特別支援学校に通う小中高の子どもたちに合わせた活動の企画・運営を行いました。

大学入学当初、私は自分が教職として生きていくことに具体的なイメージを持つことができていませんでした。しかし、教職を目指して学び続ける仲間たちや、着々と成長してゆく姿を見せてくれる子どもたちに囲まれた大学生活を送りながら、教師という職業に人生をかけてみたいと思うようになりました。特に印象的だったのが、学部3年次での教育実習で

す。教育実習生という身分であるにもかかわらず、私自身が行った児童への介入によって変化してゆく様子から、教師としての自分のもつ責任の大きさを感じました。また、その変化が子どもたちにとっての成長であってほしいという思いから身震いしたことを覚えています。

この教育実習が、教職開発専攻でもっと学びたいと思うようになったきっかけでもあります。私のクラスには、当時M1だった竹内達郎先輩が長期インターンをされていました。竹内先輩は児童の特徴をしっかりと把握されており、授業ではそれぞれの児童が主体的に授業に参加しようとしている姿勢を見て取ることができました。反省会でも児童の様子から授業を分析されており、授業を作りあげるための基礎としての児童見取りの大切さを実感させられ、自分も教職専門性開発コースの進学を志願しました。教職とは「学び続ける専門職」とも言われるように、日々成長してゆく子どもたちと同様に教師自身も学び、成長してゆくものだと思います。そのためには「振り返り」が大切だと私は考えています。その日のインターンで経験したことを意味づけ、価値付け、丁寧に振り返ることが教師としての学びであると思います。2年間、自分自身のためにも、お忙しい中指導してくださるインターン先や教職大学院の先生方のためにも、そして将来指導させていただく子どもたちのためにも、丁寧に学んでいきたいと思っております。よろしくお願いします。



黒田 苑 くらだ えん

はじめまして。4月より教職開発専攻の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました黒田苑です。新潟県出身の、富山大学卒業という、福井県とのつながりはありませんが、2年間福井大学の大学院で勉

学に励みたいと思い、進学を決意しました。富山大学の在学中には、中学校1種（国語・英語）、高等学校1種（国語・英語）を取得しました。大学院では国語科教員になるための実践・研究に臨みます。

富山大学の4年間では、主に2つのことを学んできました。一つは卒業研究に至るまでの教科専門の学びです。文学理論という分野を専攻し、物語文や論説文を扱い、文章の読解を深めてきました。卒業研究では、地元の児童文学作家・杉みき子氏の中学校教科書教材に採用された作品（『小さな町の風景』より）を「風景」という観点から分析をしました。物語内で中心人物が対象の風景を見ることによりその内面が変化していくという読み方ができました。

二つ目に、子どもとの関わりからの学びです。私はサークル活動とアルバイトで子どもたちと関わる機会を得ました。競技かるた部に所属し、富山県の県立

高校の部活動指導のボランティアを週に1回4年間継続してきました。4年間のなかで高校入学から卒業まで関わる事ができた世代もありました。子どもたちの高校生活の一端ではありますが、彼らの多種多様な成長を部活動という面から支援してきました。次に、アルバイトでは4年次に特別支援学校や特別支援学級に通う子どもたちの放課後支援に携わりました。学部では特別支援学校への長期実習はなかったのですが、どのように関われば子どもたちのためになるのか手探りでした。グループホームの先生方とチームで一人ひとりの子どもの支援をすることの大

切さを学びました。これらの経験からも様々な子どもたちを支援することができる教員になりたいと思います。

大学院のインターンシップでは、至民中学校に配属していただきました。タテ持ちという福井県の教育の特色にも触れながら、それぞれの学年の子どもたちと関わる事ができ、大変嬉しく思います。生徒たちの発達段階や現状を踏まえ、生徒たちが意欲的に取り組みたいと思えるような実践・研究に努めていくことができたと思います。これから2年間どうぞよろしくお願い致します。



清水 広平 しみず こうへい

初めまして。私、今年度より福井大学連合教職大学院でお世話になります、清水広平と申します。教員免許は中学と高校を取得し教科は英語で、配属校は至民中学校となりました。

学部生時代は東京にあります、法政大学で国際文化を専攻しておりました。学部の特色上、教職に関する授業以外では教育について学ぶ機会は殆どありませんでしたが、ゼミの先生の指導方針のため、自分が情熱をもてるテーマで執筆することができました。そのため、自分自身の興味関心を深く掘り下げていくことから始めました。やはりその先には教育の二文字が常にありましたが、最初はそれ以上に深めることができないでいました。その中で自分の疑問や違和感の一つの答えとなったのが日本における近代化でした。現在を生きる私が過去の近代化の中で規定されてきた「伝統」などに大きく影響を受けていることに衝撃を受け、また教育が近代化の中で果たした役割についても理解を深めることができました。

以上の経緯より卒業論文においては、明治期の教育学者である澤柳政太郎の教育観について執筆いたしました。一方、卒業論文を執筆する傍ら大学卒業後の進路についても考え続けており、最初は教育系の研究者を養成する大学院を検討しておりました。しかし、母校での教育実習を通してその考えは一変しました。澤柳が主張した経験主義的な子供中心主義の授業を志していたのですが、実際の教育実習では伝統的な知識伝達型の板書スタイルで3週間を過ごしました。その経験によって、現在の私が研究職を志したとて実際の教育現場との乖離は避けられないと考えようになりました。そのため、まずは実際の教育現場で働ける力を身につけ、それだけでなくその実践を俯瞰し省察できるようになりたいと思い、福井大学連合教職大学院を進路として選択しました。まだ何もできない私ですが、できないからこそこの福井大学連合教職大学院での2年間で様々なことに挑戦し、実りのある院生生活にしたいと思います。福井という新天地で不慣れなことばかりで先輩方や先生方、そして同期には多大なる御迷惑をお掛けすることになるかと思いますが、2年間御指導のほど宜しくお願い致します。



藤本 紗奈

はじめまして、今年から福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました藤本紗奈です。

昨年度までは京都女子大学文学部史学科に所属していました。取得免許は中学校(社会)、高等学校(地理歴史、公民)です。

大学では主に西洋史を中心に研究を進め、特に私は中世史を専攻していました。卒業論文では現在のベルギーに位置する都市アントワープで、当時(16世紀)、活版に行われていた絵画取引の様相について研究していました。研究を進めていく中で、絵画市場の発展は単にアントワープを文化的価値の高い都市として名を広めただけでなく、これまでに存在しなかった芸術家という新しい職業を生み出す契機であったとわかりました。大学で研究する「歴史学」は、これまで私が勉強してきた「歴史」とは大きく違い、入学当初はその大きな違いに非常に驚きました。

歴史に関する教科は暗記科目であると考えている人々はたくさんいます。実際私も大学に入るまではそう思っていました。だからこそ授業中は大きな出来事の年代と単語を覚えるのに必死でした。しかし大学に入って教授の「歴史は年代や名称は覚えなくていい」という言葉に強い衝撃を受けました。大学4年間「歴史学」を研究していく中で、大切なのは「何

ふじもと さな

が」起こったかではなく、「なぜ」起こったのかということでした。当たり前のことかもしれませんが、テストでいい点を取ることを目標としていた私は気づくことができませんでした。このことがきっかけで私は、歴史は暗記ではなく、もっと楽しい教科であることを多くの人に知ってもらいたいと考え、大学ではベルギーの文化史を研究する傍ら、高校世界史におけるパフォーマンス評価を取り入れた授業について研究していました。

しかし教育学部ではないため、教育を中心に学んできた教育学部の学生より、大学で得ることのできた知識もまたそれを活用できる機会も少なかったことは事実です。そのことが私は、現場に出るうえで大きなハンデだと感じていました。現場に出てしまえば新人もベテランも関係なく、児童・生徒達にとっては自分の一生を左右するかもしれない存在となりるのが教員だと考えています。大学で学ぶことができなかった、学級運営や生徒指導、地域との連携の方法といった学校運営など、授業に限らず、広い視野で学校というものを学んでいきたいと考えています。

また私は小学校免許プログラムによる小学校免許の取得をめざしています。将来教員になるうえで、発達段階における子どもの特徴を把握することやそれに合った授業方法を勉強するためには、小学校免許を取得することが適切であると判断したからです。

長期インターンシップを通して、教員としての力はもちろん、人として成長できるように今ある環境に感謝を忘れず、日々努力していきたいです。3年間よろしく願いいたします。



村林 雅也 むらばやし まさや

はじめまして。今年度、教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました村林雅也です。小学校免許プログラムの受講のため、3年間お世話になります。出身は愛知県ですが、4年前の大学入学を機に福井県へ移り住み、北陸の気候にも慣れてきたところです。小学生の頃に吹奏楽をはじめからトランペットを続けており、最近ではトランペットの他にソプラノホルネットも練習しています。

昨年度までは、福井大学教育地域科学部の地域科学課程に所属していました。というのも、学部入学時は教員志望ではなかったために、様々な領域を総合的に学べる学科を選択したのです。様々な分野を学ぶ中で教職課程も履修したのですが、そこで経験した教育実習や心のパートナー活動では、子どもたちが以前はできなかったことができるようになる姿や、学校行事を経て成長する姿を目の当たりにしました。そして教員として子どもの成長を間近で見ることの喜びを感じたのです。一方で学習支援の難しさや子どもたちとの信頼関係の形成方法など浮き彫りとな

った課題も多く、教員の仕事や学校について深く学びたいと考え、大学院に進学することになりました。

今年度、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程で長期インターンシップをさせていただくことが決定しました。教職大学院での学びの核となる長期インターンシップでは、「授業を作る力を身に付けること」と「子どもへの理解を深めること」の2点を特に学んでいきたいと思っています。現場の先生方が実践される授業を参観しながら、授業の構成の仕方、発問の方法、子どもへの声の掛け方、進度が遅れている子への対処の方法など、授業づくりの細かい部分に至るまでよく研究していきたいです。そして自らも実践し、将来教員として子どもの前に立つときに生かされるような経験を積んでいきたいと思っています。

また、様々な性格や学力、家庭環境を持った子どもたちひとりひとりの個性を見極め、それぞれの子どもに応じた指導や声かけを行う力を身に付けたいです。そのために、授業場面のみならず学校生活の様々な場面の子どもの様子を観察し、先生方の接し方にも注目していきたいです。

これからの学びには期待よりも不安の方が大きいですが、インターンシップやカンファレンス、ラウンドテーブルなどの学びの機会を十二分に生かしながら、初心を忘れることなく教員となるための基礎を身に付けていきたいと思っています。3年間よろしくお願いいたします。



吉田 聖 よしだ あきら

この度、福井大学連合教職大学院に入学させていただきま

す吉田聖（よしだあきら）と言います。平成8年8月7日生まれの22歳です。福井県生まれの福井県育ちです。ただし大学は大阪の大阪体育大学に進学しました。大学では部活にも入っておりバドミントン部に所属していました。趣味は料理やトレイルランニング、バドミントンです。体育大学出身ですが、スポーツはそこまで得意ではありません。特にサッカーや野球は苦手です。得意なスポーツはバドミントンとバレーで、バドミントンに関しては小学校からやっています。好きな食べ物は魚介全般で、特にお寿司が好物です。将来的には魚を自分でさばけるようになりたいと考えています。最近、釣りにも興味が出てきました。余裕ができましたら誰か一緒に釣りに行きましょう。嫌いな食べ物は茄子で苦手なものはホラー映画、雨の日の車の運転です。

私は緊張しやすく、気弱なため初対面の人と喋るのは苦手です。しかし、喋ることは嫌いではなくむしろ好きなのでこちらからしゃべりかけるよう努力しますが、どんどん喋りかけてくれるととても嬉しいです。

大学院では、長期のインターンシップを通して実践的に学ぶことができるため、児童との関わり方だけでなく、学級経営や指導方法の具体、教員同士の連携、保護者との関わり方も学んでいきたいです。卒業研究で行っていた電子黒板の効果的な活用方法を含めたICTの教育活用についてより深く研究していきたいと考えています。大学では実践事例を分析し授業モデルの作成を行ってきましたが、インターンシップを通して実践を重ね課題を明らかにし、電子黒板のよりよい活用方法の研究を進めていきたいです。

そして、楽しいと思える授業展開や児童が主体的に考えることのできる授業作りなどにおいてより多くの経験を積むために、私は率先して学校現場に向き、教員の方々の児童との関わり方や授業における発問の仕方や学習活動における工夫などを学んでいきたいです。

私は、児童とともに成長していける教師を目標にしています。この目標を実現するためにも、児童の視点に立ったコミュニケーションと授業づくりを大切にして、魅力的な授業作りを心掛けたいです。児童から「わかる」「できる」が引き出せるように、学び続けていくことが大切であると考えています。この目標を忘れることなく本学で研究を深め、より多くの経験を積めるよう努めていきたいです。

開講式

足羽川沿いの桜が満開に咲き誇る2019年4月6日（土）の午後、今年度の連合教職大学院の出発となる、2019年度開講式が行われました。

今年度は、授業研究・教職専門性開発コースに7名、ミドルリーダー養成コースに8名、学校改革マネジメントコースに16名の計31名が入学しました。また、新たに4名のスタッフが加わりました。

開講式では、柳澤研究科長から挨拶があり、歓迎と激励の言葉が述べられました。話に熱心に耳を傾ける1年目の皆さんの様子から、緊張の中にも、これからの協働探究への期待や新たなチャレンジへの決意が見てとれるようでした。

その後、スタッフから年間計画や4月の合同カンファレンス、拠点校や連携校の担当教員、履修手続き等の説明があり、記念撮影が行われました。また学校別分科会も行われ、1年目から3年目までのメンバーおよびスタッフが一緒に今年度の展望や連携について話し合いました。そこでは1年目の皆さんも打ち解けた様子で語り聴き合っておられ、連合教職大学院らしいスタートになったように思います。

1年目の皆さん、ご入学本当におめでとうございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。



[illegible]

実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2019

2019年6月21日(金) 22日(土) 23日(日)

会場：福井大学文京キャンパス

「実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル Spring Sessions 2019」(2019年6月21日、22日、23日)の参加申込スタートです！みなさまのご参加を心よりお待ちしております！

【参加申込】

福井大学連合教職大学院ホームページのURL申込フォームからお願いいたします。団体での一括申込をご希望の方は、ホームページ上の団体・一括参加申込書(Excelファイル)に必要事項をご記入いただき、福井大学連合教職大学院代表メールアドレス(dpdtfukui@yahoo.co.jp)まで添付ファイルにて送付ください。

【募集中です】

6月23日(日)ラウンドテーブルでの実践報告エントリーを募集中です！

【日程】

6月21日(金) 17:30-18:40 プレセッション

6月22日(土) 13:00-13:10 オリエンテーション

13:10-14:10 ポスターセッション (児童・生徒ポスターも実施予定)

14:20-15:50 シンポジウム

16:00-17:40 フォーラム

Zone A 学校

Zone B 教師教育

Zone C コミュニティ(福井駅東口 アオッサで実施予定)

Zone D 授業研究

6月23日(日) 8:20-14:00 ラウンドテーブル・クロスセッション

※詳細は、決まり次第、ホームページにアップされます。ご覧ください。

Schedule

5/18 Sat. 5月合同カンファレンス A日程

5/25 Sat. 5月合同カンファレンス B日程

6/21 Fri. - 6/23 Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2019

【編集後記】

ピンク色であった桜の季節が駆け足で通り過ぎ、少しずつ緑色が目に付くこの頃です。皆さんの新しい学校や職場でも、新しく仲間になった皆さんが、だんだんと自分らしい姿を見せている頃ではないでしょうか。連合教職大学院も、いよいよ合同カンファレンスのスタートです。まずは、自分が今思っていることや、考えていることを口に出し、文字に綴って表現していきたいですね。そこから何かが始まると思います。(N)

教職大学院 Newsletter No.121

2019.4.20 内報版発行

2019.5.24 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp